

暁

次に示すのは、坂川栄治『遠別少年』（光文社文庫）の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

北国の中学校の休みは、夏は短く冬が長かった。天気予報で二、三日晴れが続くとわかると、前の日の夜に茶の間でどうこうと音を立てて燃える石炭ストーブの横にスキーを持ち込んで、翌日の雪質を考えながらスキー板にワックスを塗った。

晴れ上がった翌朝の九時頃、友達がスキーを履いたままの不自由な格好で、玄関の戸を少し開け「エーチャーン、行くよオ」と叫んだ。その声で、集合場所である我が家の家の中はてんてこ舞いになった。

「ホラア、みんな来ちゃったよオ。だから早く用意すれって言ってるのに、おまえがダラダラやってるからア」
「うるせえなア。いんだよ、待っててくれっから」

「なに言ってるんの。他人を待たしたら駄目だよ。そんな偉そうなことばっかり言っていると、そのうち罰が当たるからね、ホントに。手袋、そこに忘れてるよ。ほら、弁当ここにあるから。気をつけんだよ、山の奥の方まで行ったら駄目だよ」

「わかってるって。行かないから大丈夫だって」

窓から玄関先のほうを見ると、まだメンバーがひとり来ていなかった。それでも家の中では①母親の小言は続いた。私が玄関で面倒くさいスキー靴のひもを締め終え、まだ追いかけてくる小言をふり払いようやく外に出ると、待っていた友達はこの母親も同じだとばかりにニヤリと笑った。

除雪した跡が踏み固められて硬くなった家の前で、ボタンボタンとスキー板を倒して靴を装着する。その頃流行っていたのが、少し高かったけれど「カンダハン」という名前の器具で、ワイヤーとバネでスキー板と靴を固定する方式だった。

それまでは、みんなが普通に履いている黒いゴム長靴のかかとを、革ベルトと金具でできたお粗末な仕掛けで、締めて固定するのが一般的だった。その方式のどうしようもないところは、金具が靴からよく外れたことと、小さな子供ならまだしも、中学一年の私たちにはダサすぎることであった。

しかし②皮肉なことに「カンダハン」が流行りはじめると、足を骨折する子が増えた。堅くてしっかりとしたスキー靴を履いて滑っている③サイチュウに、転び方がまざいと今まで簡単に外れたスキー板が、新しい方式ではなかなか外れないために、ひねった状態でそのまま脚の骨が折れた。

そんな町なかの金のある家の連中を私たちは、骨なんか折る奴らは単純にやわでスキーが下手くそだからだと馬鹿にした。

四人全員が揃うと出発した。スキー場へ行くのに、道などなかった。

目的地まで真っ直ぐに道なき道を、スキーを滑らせて歩くだけだ。

家の前からそのまま国道と畑を横切り、線路を越え、森に続く平らな雪原を、快晴の日の銀色の照り返しのまぶしさに目を細めながら小一時間ほど歩く。

腰にしぼりつけた袋には、作ってまだ間もないおにぎりが入っていたから腰が温かった。

スキーを履いて歩くのは単調な運動だったけれども、夏には歩けない場所を通る解放感が気分を明るくした。

中学生ではまだまだなにをやってもおかしくて歩きながら大声で笑った。いたずらをし、ふざけて友達を押し倒したりもした。

私たちは笑いながらしゃべりながら、自分たちの足もとの濃い影と一緒に横一列になって歩いた。振り返ると雪の上には、まっすぐな八本のスキー跡が白い広がりの中に、熊手で引いた跡のように延びていた。その先には平たい町並みが、小さく見えた。

しばらく歩くと、まばらだった立ち木がいきなり増えて、やがて森の入り口に着いた。雪原にすつくと立つ白樺やエゾ松の姿は、根を下にした木が空から落ちてきてそのままの姿で真っ直ぐに雪に突き刺さったように見えた。

白く輝く雪の上には木々の細い枝が、④ジョウミヤクを張り巡らせたように影を作っていた。そしてその上には、兎や狐が餌（えさ）を探してウロウロした小さな足跡が、点々と遠くまで延びて、どこかへ消えていた。

森の中を通っていると、たまに上の方から雪の塊（かたまり）がドサツと落ちてきた。見上げると白樺の枝が、重い荷物を下ろしてせいせいしたように揺れていた。

それを見て誰かが④マネをした。木のそばを通る時に素早く⑤ミキを叩くと、何も知らずに後ろからついてきた奴の頭の上に雪の塊が落ちた。

空は高く青く、空気は③凜(りん)として澄み渡り、風はなかった。

私たちの叫び声や笑い声は、一度森の中に小さく響き渡ってから雪の中に④スい込まれた。

それからその森を抜けて、しばらくにもないところを歩く。そして次の森が見えたら、そこが山の斜面を切り開いて作った柳町スキー場だった。スキー場といっても名ばかりで、山の木を切り倒しただけの一キロもないゆるやかなスロープが広がっているだけで、リフトも建物もなかった。ただの人のいない白い斜面があるだけだった。

私たちはスキー場まで歩いてきただけで汗をかいていたから、早速、手頃な木の枝を見つけて弁当やアノラックをまとめて掛けて身軽になると、セーターだけになってスロープを登りはじめる。

スキー板をカタカナのハの字を逆にした形にしたり、斜面に対して体を横にしてニの字を重ねるような単純な運動をくり返して登った。何度かの休憩をはさみながらようやく頂上まで登りきると、足首は痛くなり、体中から汗が吹き出した。

頂上に立つと、爽快な感激があった。はるか彼方まで広がる音のない大パノラマの景色に圧倒され、私たちは思わず大声を張り上げたくなった。

「ヤッホー」とか「アホー」とか「バカヤロー」とそれぞれが勝手に叫んだ。その声は枝葉にたつぷりの雪を抱えた木々につかつかって小さくこえました。

さんざん叫んで飽(あ)きると、④私たちはその場に腰を下ろして少し休んだ。すぐに滑り降りようとは誰も言わなかった。登ってくる時のしんどさを考えると、⑤もったいなくて一気に滑り降りる気になれなかったのである。

登るために二十分くらいかかるのに、滑り降りるのに一分では、楽しみがすぐに終わってしまうからだ。

風を切って滑り降りる時、確かに寒風が汗をかいた体に気持ちいいのはわかるけれども、そのあまりの楽しみの短さに、スキーというのはなんて自虐的なスポーツなんだろうと、誰もが感じていたのだ。

それでも何度かの短い楽しみを味わっているうち、昼頃になるとようやくスキー場にポツリポツリと人が増えてきた。

昼食後も、登っては滑り、登っては滑りを繰り返していると、あたりの空気から昼間の柔らかさがゆっくりゆっくり消えて夕方になった。

空に青紫色とピンク色が混じり始め、頂上から見える遠くの山並みが青黒くシルエットに見えるようになって、ようやく私たちは帰り支度を始めた。

行きはよいよい、帰りは怖いではないが、帰り道は登り降りで体がすっかり疲れ果てていたから足が重たかった。友達の口数も、行きに比べると極端に少なくなった。

冬の夜は思ったより早くやってきた。陽が沈み、今まで白かった雪原が青い色に染め上がっていくと、気温は急激に下がって吐く息は白くなり、スキー板を動かすたびに足元で雪が締まってギュッギュッと音を立てた。

ストックを握っている手袋の中の指先はこごえ、汗ばんだ体は冷えきって風邪を引く一歩手前のようになった。腹も減っていた。

来る時に通った最初の森にさしかかると、もうあたりは冬の夜独特の深い青みを帯びて、昼間と同じ森には見えなかった。

もくもくとスキーを滑らせながら、みんなそれぞれに頭の中では色んなことを考えていた。

熊が出るんじゃないか、お化けが出るんじゃないか、道に迷ってしまうんじゃないかと、みんなの勝手な想像はおさら恐怖感をつのらせた。

「なんか変な音聞こえないかア？」

「やめろよオ、ふざけんなよオ、タカ」

「押すなよ」

「おい、こっちの方通るべ。そっち、ほら、木多くて気持ち悪いべや」

「この跡でいんだべ、スキーのやつでよオ、なあ、いんだよなア」

「これ、おれたちの跡だよなア、なア？」

「これ、熊のでないかア？ 足跡よ、ほら」

「ばか、そつたら小さくないべよ」

「早く行けよ、そつたらこと言う暇あつたらよオ」

暗くなつてすっかり表情を変えてしまった森は、濃い青色の雪原に乱立する木々の黒いシルエットを亡霊のよう

に見せた。夜の森は⑥無性に怖かった。無言で直立する木は今にも動きだしそうだったし、太い木の陰には恐ろしい魔物が隠れているようにも思えた。

暗い森の奥で、私たちの気配にいきなりギヤーギヤーと騒ぎ立てる名前のわからない鳥の声があった。その突然の声でビクッと全身に電気が走り、背筋がゾクツとした。

辛うじて見える昼間の自分たちのスキーの跡でも無かったら、私たちは簡単に道に迷ったはずだった。暗い中でどこを見ても⑦木々が迷路を作っていたからだ。先頭の者は下を向き、スキー跡を見失わないように用心して進んだ。

雪が濃い⑧群青色にまでなると、恐怖感はずます強さを増し、自分たちがいつの間にか海藻の⑨絡み付く深い海底にいたような、暗い墓場をさまよっているような気分になった。頭の中では、誰かに聞いた幽霊の話がよみがえってきていた。

私たちは誰も口をきかなくなっていた。四人が縦に一列になって、前を行く奴に遅れを取らないように必死で⑩調整を合わせた。そんなところで誰も遅れなくなかったし、一番後ろになるのも嫌だった。みんなのスキーを滑らせる足も自然と早くなった。

森の中が特別に静まり返っていると感じたのは、スキーを滑らせる音と吐く息の音、そして不安にかられて余計に大きくなった自分の心臓の音しか聞こえなかったからだ。⑪私たちは口に出しては言わなかったけれど、もっと早く帰り支度をすればよかったと、それぞれに後悔していた。

ようやく森を抜けて、立っている木がなくなるところまで来ると、もう日はとっぷりと暮れていた。

天と地の区別がつかなくなるほどに黒く塗りつぶされた大きな夜の向こうに、小さく細長く町の明りがオレンジ色にまたたいて見えた。人の⑫営みの証しとしての町明りを目にすると、疲れきった体に必死で⑬筋交いをしていた緊張感や恐怖感が、ようやくゆるゆるとほどけた。歩くスピードもゆっくりになった。

安心すると今まで恐怖心でいっぱいだった頭の中は、急に現実的になった。家に着いたら怒られるだろうなと思った。

寒くて顔全体の筋肉が動かなかったから、一番怖いところを通過したというのに会話はなかった。鼻水が垂れてきても拭く元気もなく、両腕をだらりと下げたままストックを引きずって歩いた。

手袋の中では冷たい⑭拳を握っていた。スキー靴の中の足も、霜焼けっぽくなっていた。もはや、動いているのは帰りたい一心で交差させている二本の足だけという状態で、私たちはまるで雪原をさまようロシアの敗残兵のようになっていた。私たちは家々の明りが一歩でも早く近づいてくれることを、ひたすら願いながら歩いた。

もう八時はずっとに回っていただろう。ようやく目印の線路にたどりつくと、線路を越えたあたりで、⑮素っ気なく「じゃあなア」の一言を言って四人は別れた。家はすぐそばだった。

疲れてボロボロになって家に着いた私は、暗い玄関先で金具を外し、スキー板をパンパンと打ちあわせて雪を払ってから玄関脇に立て掛けた。そして怒られることを覚悟しながら「ただいま」を言って家に入ると、ほの暗い明かりの小上がりでドスンと腰を下ろして、手袋を脱ぎ、かじかんだ指で凍りついたスキー靴のひもをほどき始めた。

その音を聞いて、家の中から心配しすぎて怒っている家族の聲が飛び出してきて、私の頭の上の方で集合した。

「こんなに遅くまで何してたのオ。父さんも怒ってたんだよ」

「みんな、心配してたんだぞ。なんでもっと早く帰ってこないんだよ、馬鹿もの」

「兄ちゃん、母さんがさ警察に搜索（そうさく）願を出したほうがいいべか、って言ってたんだぞ」

「ホントだよ、心配かけてエ」

「どこさ行ってたのよ。暗くなつたから、迷つてとんでもないとこさ、行っちゃったんでねえかって言ってたんだ」いつもなら反抗期も手伝って「ウルセーナー」ぐらいは思ってたかもしれないが、その時私は腹が立たなかった。下を向いて靴ひもをほどきながら、遅くなった理由をボソボソと言った。

家族は理由を聞いて可哀そうに思ったのか安心したのか、母は「腹減ったべ。はやく入って御飯食べなさい」と言い残すと台所に戻り、他の者は「オーツ、寒い、寒い」と言いながらストーブが燃え盛る茶の間に戻っていった。

その時私は恥ずかしくて、顔を上げられないでいた。

ようやく家にたどり着けたことで張っていた気がゆるんだのと、自分に向けられた家族の⑯オレンジ色の言葉が嬉しくて、ジワッとあふれ出てきた涙で手元がぼやけていたからだ。

鼻水をすすり上げる音も寒いせいだと思われたようだった。中学生にもなつて、という気持ちが強かった。だから泣いていたのを家族の誰にも悟られなかったことで、その時私はホッとしていた。

問 1 — ⑦③について、カタカナは漢字に直し、漢字には読み方を記しなさい。

問 2 — ③「凜として」・⑥「無性に」・⑨「筋交い」について、ここでの意味として最も適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

③「凜として」

- | | | |
|------------|------------|------------|
| ア 重苦しそうな感じ | イ 軽やかな感じ | ウ さらさらした感じ |
| エ 張りつめた感じ | オ まぶしそうな感じ | |

⑥「無性に」

- | | | |
|-----------------|-----------------|-------------|
| ア 生きた心地がしないくらいに | イ 生き物が全くないかのように | ウ 男も女も関係なしに |
| エ これといった理由もなしに | オ 情けようしやないまでに | |

⑨「筋交い」

- | | | |
|--------------|------------|------------|
| ア おいうちをかけていた | イ ささえられていた | ウ じゃまをしていた |
| エ 立ちほだかっていた | オ つきまとっていた | |

問 3 — ①「母親の小言は続いた」について、この母親の説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 口やかましくてもいつも息子のことを心配している母親
 イ 危険なことを何としてもやめさせようとする気弱な母親
 ウ 子どもの毎日の様子に関係なく神経質で口うるさい母親
 エ 自分の息子より友達の気持ちを優先する礼儀正しい母親
 オ 息子がいつも言うことを聞かないのをなげいている母親

問 4 — ②「皮肉なことに」について、どのような点が「皮肉」なのか、わかりやすく説明しなさい。

問 5 — ④「私たちはその場に腰を下ろして少し休んだ」について、この時の「私たち」の心情としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------|----------|-------|--------|---------|
| ア 解放感 | イ せいせいした | ウ 爽快な | エ しんどさ | オ 気持ちいい |
|-------|----------|-------|--------|---------|

問 6 — ⑦「木々が迷路を作っていた」について、この表現からわかることを説明しなさい。

問 7 — ⑧「私たちは口に出しては言わなかった」について、その理由を説明しなさい。

問 8 — ⑩「素っ気なく「じゃあなあ」の一言を言って」について、どうしてこのような態度をとったのか、説明しなさい。

問 9 — ⑪「オレンジ色の言葉」とはどのようなものか、自分のことばで説明しなさい。

問 10 — ⑤について、この時の「私たち」と同じように「もったいなくて一気に（ ）する気になどなかった」あなたの経験を、具体的に教えて下さい。